

「独立」とは「生産手段の私有」を含むが、これは、交易圈の拡大と需要の拡大によつて独立ぞきた。多くの入間が必要とするから、権力に干渉されずに生産ぞきる。このことは、需要の拡大を可能とする生産力の増大による交換のための穀物または土地といふ生産手段を使つた農作物が、支配層の下部にまごまたは農民にまご残つてゐることを必要とする。

6. しかししながら、ここまごの時代はやはり穀物生産の比重が圧倒的ぞあり、ほとんどの入間は穀物生産に従事しつゝる。それは少くもなおさず、土地を離れて生活することができないといふことぞあり、それゆえ、土地を支配しつゝるもののがこの時代の生活を支配しつゝるものであるといふことぞある。本格的な外元的生産様式への移行は、次の市場機構の作用による農民の新たなる生産物の生産への強制的移行によつて始まる。

さらなる穀物の過剰生産の中ご、交換における市場機構が作用し穀物の交換価値が低下

してくる。それにより、穀物を財政基盤とする領主たちは困窮してくる。と同時に農民も困窮してくる。そして領主たちの実質的地位が低下し、新たな生産手段の所有者の地位が向上してくる。これに対する領主たちの政治的対応はさまざまである。日本の江戸時代のように農民を身分制（この身分制は前に書いた支配階級内部の身分制とは違ふ。新たな生産手段の所有者の伸張の中での全人民に対するもの。）で土地に縛りつけることによつて農耕社会を維持しようとしたり、ヨギリスの一部の貴族のように土地を固め込み新たな生産であるとニヨの牧羊を始めたり等である。

そして、穀物だけでは領主は家庭を養うことができなくなる。つまり、権力構造を維持できなくなる。

このようにして、領主が全体的に没落していいく中で、（しかし、ブルジョアジーがとつてやわるほどではな）領主の中でもっとも強い者（君主等）が支配を強めいく。（絶対

主義の時代) しかし、次第にブルジョア(新たに生産手段の所有者)の力が強くなる中で君主はそれに同化せざるを得ない。もし同化しきれば、ブルジョア革命と呼ばれるものが起ころ。ただ支援經濟の影響を受けた窮屈な統計による農民の参加が、ある程度、革命の性格を規定していく。例えば、フランス革命は特徴的である。

#### 〔第5章〕 歴史の変化その二

自由放任主義經濟以降第二次世界大戦までの經濟、それは農業、特に穀物の生产力の増大による工業への移行の時期であった。そして、穀物及び土地といふ生産手段を使つた農作物の生産から別の新たな商品の生産への、移行の流れ、これがこの時代の変化を引き起しきつゝ。以下に、いくつかの例を述べよう。

1. 世界恐慌：1929年10月、アメリカの株式相場の暴落から始まる世界大恐慌の1年前、

1928年末において、東ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、中南米、アジア諸国で農業恐慌が起こる。アメリカにおいても、1929年の夏に農産物価格の低落が起こる。このような農産物の過剰生産による農業恐慌の上に、需要の減退による工業部門の恐慌が重なって生じたのが世界大恐慌である。世界的ホーリー農産物過剰、それに従事している人間の過剰の中、新たに商品の生産へと移つておかなければならぬのだが、その移るべき工業部門において恐慌が起つたことにより、またたく間に解決の道が閉ざされてしまったのである。

2. フラミズム：この時代の貧困、それがフラミズムを起してつく。フラミズムは最初、イタリア、ポーランド、ユーゴスラヴィア等の後進農業国において発生する。そして、ドイツでも発生した。また、日本においても農本主義とフラミズムの関係はよく知られる。ヨーロッパが受けている体制の矛盾、その原

因、解決の方向が見出せなかった層、それが  
 ファシズムの民衆の中の支持率のござる。従  
 つて、ファシズムとは、体制矛盾の中ご、体  
 制内変革または体制自体の変革の道が見出せ  
 ない層に、自我の変容が起ニリ、それが民族  
 のエゴへと変化したものと定義することがで  
 きるだろ。例えば、ドイツにおへては、社  
 会民主党さえその矛盾の解決の方向とは、さ  
 りと明示ござなかつた。日本におへては、社  
 会主義者と資本主義者の間ごの論争の上ご、  
 現状規定、解決の方向を見出せなかつたの  
 ある。

3. 社会主義革命（後進国移行期革命）：  
 資本主義の矛盾を最初に感じたのは、農耕社  
 会が崩れていへる過程における農民ごあつた。  
 自らの生産する穀物が過剰生産状態にある（  
 または交換の相手側におへてすこに満たされ  
 てゐる）ためにその交換価値が低い。故に他の  
 の人々（市民）と同じようなく生活をしようと  
 するなどは困難せざるを得ない。（相対的貧

困意識) として彼らは、金融資本家(地主・有力農民・市民等)に何等かの生活の糧のかわりに土地を手離し、小作へ転落していった。

口ニテ、中国で社会主义革命が起つた原因は、上述のよう本状況の中に、生産性の高い生産手段またはそれによる商品が導入されたことによる。それに上りその後進国内部に芽生えつつあつた生産手段が、新たに導入された生産手段またはそれによる商品によって完全に破壊される。そして、その生産性が高いために就職できなくなる。(例、中国植民地化以前に、綿織物業は家内制手工業、マニマニクチャリング階まで発達していった。そこへイギリスにより生産性の高い綿製品が持ち込まれた。最初のうちは剥削、労働報酬を削、これを対抗させていたが、結局対抗しきれず破壊されてしまった。) また、多數の農民も穀物の交換価値が低いため困窮していった。これらにより大量の失業者がそこには存在し、地主・资本家の徹底的な榨取を受けた。

以上のような状況の中で起つたのが、田舎しつつある農民、搾取されたプロレタリアと雇ひ小作人、失業者による、「市場経済による農耕社会から多元的生産様式への移行」<sup>5</sup>ではなく、「計画経済による農耕社会から多元的生産様式への移行（後進国移行期、革命）」である。

## 〔第6章〕 経済モデル

### 1. 基本的な考え方

自由放任主義交換経済とはいかなるものかを考えるために、簡単な経済モデルを構成する。ただし、定量的モデルではなく定性的モデルである。そこでは、生産空間と消費空間というものを考える。消費空間においては、効用理論を使う。生産空間においては、労働の量を基本に置きながら質の問題も考慮する。自由放任主義交換経済の発展は生産空間と消費空間の変遷により特徴づかる。

### 2. 生産・消費サイクル

著者 泉 宏明

住所 〒739-0145 広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

[http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri\\_art/izumi/](http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/)

copyright©2012 泉宏明 all rights reserved.